

日本と米国におけるナイジェリア人移住者のコミュニティと

資本形成に関する比較研究

－関東地域と米国テキサス州の移住者からの聞き取り調査から－

財団法人 エイズ予防財団

川田 薫

在日アフリカ人来住者を対象者とした生活調査に関する研究はこの数年に少しずつであるが、ナイジェリア人、カメルーン人などのコミュニティ調査の蓄積がされている[和崎:2008]。1980年代半ばから出稼ぎとして来日し始めた、在日アフリカ人の中で最も来住者数が多いナイジェリア人も来日から20年を経て生活も多様になりつつある。就労機会を求めて来日したナイジェリア人の多くは、工場や遊興サービス業という肉体労働、長時間勤務、危険を伴う仕事が彼らの典型的な就労場となっていた[川田:2005]。現在の就労環境を見ると、自営業の会社社長や個人自営業者、工場勤務や遊興業に従事する労働者との格差が生じており、階層移動にも変化が現れ始めている。

日本社会で暮らすナイジェリア人当事者の中には閉鎖的社會と語られるように、特に就労機会が限定される点は、生活基盤や精神的な不安定化をもたらす。そこで、本報告では著者が先行研究として発表してきた在日ナイジェリア人コミュニティが結成している出身州の同郷人団体や移住者のライフヒストリーの蓄積を下にして、米国に移住しているナイジェリア人の生活環境と同郷人団体との比較をしていくことで、在日ナイジェリア人の生活世界が投影する日本社会を再考していく試みである。

主に両国の同郷人団体の活動とその機能の事例から移住者の資本形成の方法の2点に焦点をあてながら、起業家を目差しているナイジェリア人が通過していく双方の社会を考えてみたい。

先行研究では、まず在日アフリカ出身者の生活に関する研究の蓄積も少ない中、日本への移住者と他の国に移住したアフリカ出身者の生活環境の比較研究はまだなされていない。生活環境を基軸としてコミュニティ形成及び資本形成の仕方の相違または類似なのかを明らかにしていくことは、在日ナイジェリア人が感じている日本社会を改めて日本人である自分に突きつけられた問題として受け止めていく作業でもある。

文献

- 川田薫, 2005, 「東京の西アフリカ系出身者の生活戦術－六本木におけるサービス業従事者を事例として－」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』60, pp. 71-92
和崎春日, 2008, 「来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究」, 平成16年-平成18年科学研究費補助金(基礎研究A)研究成果報告書